様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２２日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22720300
研究課題名（和文）　西アジア初期農耕社会における物資貯蔵活動の研究

研究課題名（英文）　Storage Activities of Early Farming Society in West Asia

研究代表者
小高　敬寛　（ODAKA　TAKAHIRO）
早稲田大学・高等研究所・助教
研究者番号：70350379

研究成果の概要（和文）：西アジア初期農耕社会における貯蔵活動の時空間的変異を見直し、文明の基盤を成した物資管理システムの生成過程を探るため、テル・エル＝ケルク遺跡の資料を分析し、他遺跡の事例と比較・検討した。ケルク遺跡では文明社会の先駆となる集約的な貯蔵活動を確認できるが､他遺跡の事例は物資管理システムの生成過程が一系的でないことを示す。初期農耕社会では生業戦略の多様化に応じて多彩な物資管理技術が開発され、その中から後の物資管理システムが生成したといえる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to reconsider the variation of storage activities of early farming society in West Asia and to discuss the formation process of the management system of commodities as a basis of the later civilized society. To accomplish these aims, archaeological evidences from Tell el-Kerkh and other comtemporary sites were examined. Although an intensive storage activity considered as a forerunner of the civilized society was observed at Tell el-Kerkh, other evidences demonstrated that the formation of the management system of commodities was a polyphyletic process. Various management methods of commodities developed depending on diversified economic strategies in early farming society, and the later management system was extracted from these methods.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：初期農耕社会、貯蔵、生業経済、移動性

１．研究開始当初の背景

西アジアは世界に先駆けて農耕牧畜による生産経済を確立させ、それを基盤として都市文明の成立に至った地域として知られている。その過程は、定住性の高まりや物資交換の活発化、余剰生産物の増加等に起因する物資管理システムの生成が深く関係し、その証拠は物資の貯蔵活動の痕跡として考古学資料に現われる。したがって、貯蔵活動の研究は当時の社会の複雑化過程を明らかにする

ための強力な手段として認識されている。
　研究代表者が発掘調査に参加している、シリア・アラブ共和国テル・エル＝ケルク遺跡は、西アジアで初期農耕社会が完成した新石器時代において最大規模を誇る集落址であり、都市文明の成立過程を探りうる重要な遺跡として世界的に注目を浴びている。1997 年からの発掘調査の結果、トルコから搬入された大型の石器石材、メソポタミアからの搬入土器、あるいは威信財や儀器と思しき特殊な遺物など、小集落に比べて多種多様な物資、およびそれらを管理するための道具である印章・印影などが多数出土し、極めて高度な物資管理システムの存在が想定されている。
　さらに、2008 年 8 月の調査では、担当する発掘区より新石器時代の大規模な貯蔵施設が良好な遺存状態を保って出土した。これは当該期の周辺地域では類例のない発見であり、これまで考えられていたような貯蔵活動の発展過程を覆す可能性を秘めている。そして、新奇性が特筆されるのみならず、当時の物資管理システムの一翼を担い、その様子を直接的に示す有力な証拠でもある。これまでに周辺諸遺跡でみつかっている初期農耕社会の貯蔵の痕跡は、いずれも小規模であり世帯単位で利用されたものと考えられるが、テル・エル＝ケルク遺跡の出土資料は世帯の枠を超えた集落単位での共同利用が想定され、巨大集落における複雑な社会組織に迫りうる。すなわち、やがて権力者の統率する神殿経済の下で誕生する、都市文明への道程を解明するうえで極めて重要な発見といえる。以上のような学術的価値から、この発見については可及的速やかに学界へ仔細を報告するとともに、調査者としての見解を提示し、内外の議論に供することが求められていた。

２．研究の目的
(1)　シリア新石器時代の巨大集落であるテル・エル＝ケルク遺跡の発掘調査によって得られた、大規模貯蔵施設でみられる貯蔵活動の痕跡を詳細に分析する。

(2)　　西アジア初期農耕社会における貯蔵活動の考古学的資料を収集し、これらと(1)の結果と比較・検討して、物資貯蔵活動の時空間的な変異を見直す。

(3)　(1) (2)をもとに、物資管理システムの生成過程を正しく跡づけ、文明成立へと向かう社会経済的あるいは文化的な変化との関連性を明らかにする。

(4)　(1)～(3)を総括し、文明成立へと向かう西アジア先史文化の動態を読み解くための、新たな研究の視座を提供する。

３．研究の方法
(1)　テル・エル＝ケルク遺跡の物資管理システムを復元する。大規模貯蔵施設の詳しい機能を同定するため、遺構の形状や建材、空間配置、出土遺物の種類・数量・コンテキスト等の分析を行ない、新石器時代の巨大集落における物資管理の仕組みを考察する。

(2)　その物資管理システムの時間軸上な正確な位置を確定する。幸い、テル・エル＝ケルク遺跡で大規模貯蔵施設が発見された発掘区では、編年整備を目的として長期にわたる層位学的シークエンスが得られている。土器を主とした出土遺物の層位学的・型式学的検討とともに、放射性炭素年代測定などから、精細な年代的位置づけを行なう。なお、この作業によって得られる編年軸は、物資貯蔵活動の研究にとどまらず西アジア初期農耕社会研究の全般に利用可能であり、将来的に更なる活用が見込まれる。

(3)　精細な年代観に基づいて、テル・エル＝ケルク遺跡の物資管理システムを他遺跡の諸事例と比較し、その特異性を評価する。西アジア初期農耕社会における物資貯蔵活動の時空間的な動態を広く見直すことで、物資管理システムの生成過程の上にテル・エル＝ケルク遺跡の事例を位置づける。

(4)　　新たに描き出された西アジア初期農耕社会における物資管理システムの生成過程と、都市文明の形成過程における社会経済的あるいは文化的な時空間的変異を比較し、相互の関連性を検証する。物資管理システムに反映されている都市文明への胎動を読み取るとともに、都市文明の形成過程を物資管理システムの変遷から見直すことで、西アジア先史文化の動態を読み解く新たな歴史的視座を双方向的に構築する。

４．研究成果
(1)　テル・エル＝ケルク遺跡で出土した大規模貯蔵施設において、約 5.5m×2m の発掘範囲で検出できた 4 つの部屋のうち 3 つには、計 14 基の貯蔵用据付式容器が隙間なく稠密に配置されていた。残りの 1 部屋も、室内で何らかの活動を行なうにはあまりに狭小であり、出入口がなく例外的に漆喰の貼床をもつことから、貯蔵空間と推測される。
　据付式容器に内容物はほとんど残されていなかったが、貯蔵されていた物資が倉庫を放棄する以前に持ち出されたであろうことは想像に難くない。出土遺物の多くは容器を取り除かねば手に取れないような視認できない位置にあり、持ち出し忘れたようにみえるからだ。その場合、この遺構が被熱したのは倉庫として使われていた時期ではない。建

物の放棄に際して意図的に火を放つ行為は世界各地で知られているが、本遺構の被熱もまた偶発的な火災の結果ではなく、物資を持ち出した後、意図的に火を放ったためと解釈するべきであろう。

先土器新石器時代におけるケルク遺跡同様の据付式容器の類例はそれほど多くないが、イラン西部からイラク北部、ヨルダン西部、イスラエル等の広い地域でみつかっている。だが、同じ室内に置かれる容器は通常 1 基のみであり、最大でも 3 基にとどまる。しかも、室内には人が移動できる空間が十分にあり、ケルク遺跡のように容器が部屋を埋め尽くしてはいない。また、複数基の容器をもつ部屋が隣接して密集することもない。

ケルク遺跡の事例は、わずか 11 ㎡程の空間に 14 基もの据付式容器が設置されており、容器のない小部屋も貯蔵設備という「倉庫」である。しかも、すべて倉庫として使われていたかどうかは不明ながら、遺構は調査区外に及んでいることから本来の規模はさらに大きくなる可能性が高い。よって、この倉庫の収容量は、当時にしては群を抜いた規模であったことが想像できる。1〜3 基ずつ配置された据付式容器を通常の住居における世帯単位の貯蔵設備とするならば、この遺構は超世帯的な公共の倉庫であったに違いない。それがやはり稀有な存在である巨大集落で発見されたのは、決して偶然ではなかろう。これまでも、小集落に比べ多様な物資の集まるテル・エル＝ケルク遺跡では、それらを効率的に管理する高度なシステムの存在が想定されていた。本資料はそれを裏付ける証拠の一つであり、集落単位で行なう集約的な物資の管理を示す最古の具体例として位置づけられる。

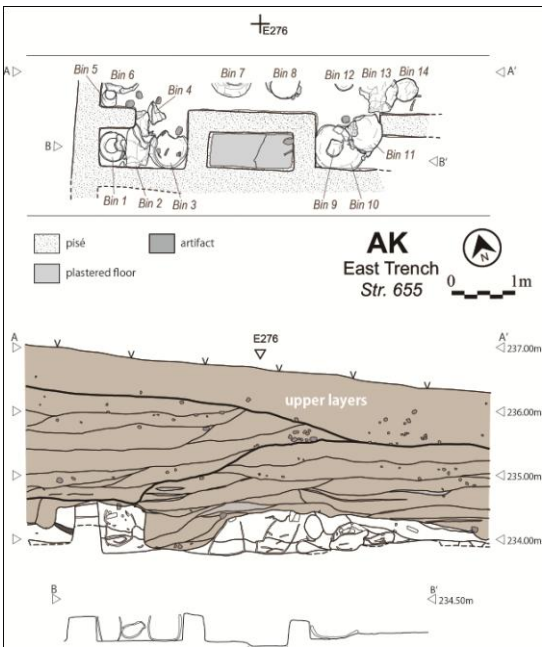

図１　ケルク遺跡の大規模貯蔵施設

(2)　2005〜2008 年にかけてテル・エル＝ケルク遺跡東斜面で発掘した「東トレンチ」では、第 1 層から第 9 層までに至る新石器時代の層序を確認できた。出土遺物の型式学的・層位学的検討から、北レヴァント・ルージュ盆地の地域編年について以下のことを指摘できる。

①　出土石器から、大規模貯蔵施設が検出された 9 層はルージュ 1 期後葉（先土器新石器時代 B 期後期）に相当すると思われるが、続く 8 層に本遺跡 2 号丘で得られたようなルージュ 2a 期（後期新石器時代初頭）の土器アセンブリッジはみられなかった。

②　8〜7 層はルージュ 2b 期（後期新石器時代前葉）に帰属し、出土土器には当地最古の土器である「ケルク土器」がみられた。但し、7 層ではその数が極めて限られ、一方で 8 層より粗製土器が多い。8 層は本遺跡 2 号丘の 4 層や北西区 2〜1 層とともに 2b 期前葉、7 層は 2 号丘 3〜1 層やテル・アレイ遺跡 2 号丘 11〜9 層とともに 2b 期後葉、と評価できる。

③　6〜4 層はルージュ 2c 期（後期新石器時代中葉）に帰属する。数種の土器の有無から、各層ごとに時期を細分できる可能性がある。6〜5 層は本遺跡中央区Ⅲ期やテル・アレイ遺跡 2 号丘 8〜5 層に、4 層は中央区Ⅱ期やテル・アレイ遺跡 2 号丘 4〜1 層に少なくとも部分的に併行する。テル・アレイ遺跡 2 号丘 4〜1 層は 4〜3 層と 2〜1 層に細分可能で、かつ後者は同遺跡 1 号丘 25〜22 層併行でもある。不明な点も残るが、ルージュ 2c 期は最大で 4 段階に細分できるかもしれない。

④　3〜1 層はルージュ 2d 期（後期新石器時代後葉）に帰属し、本遺跡中央区Ⅰ期やテル・アレイ遺跡 1 号丘 21〜18 層などに併行する。

なお、これまで得られた放射性炭素年代測定値に基づくと、9 層は前 8 千年紀末、8〜7 層は前 7 千年紀前半、6〜4 層は前 7 千年紀後半、3〜1 層は前 6000 年前後との推定年代を与えることができる。

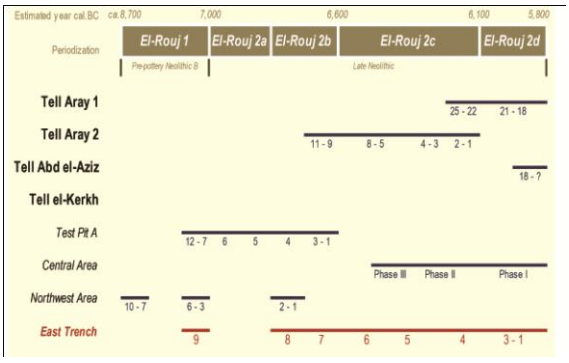

図２　ルージュ盆地の新石器時代編年

(3)　2011年8～9月にアゼルバイジャン共和国ゴブラルに所在する新石器時代遺跡ギョイテペの発掘調査、同年9月および2012年8～9月にトルコ共和国カイセリ県の遺跡踏査に参加し、テル・エル＝ケルク遺跡の事例と比較対照可能な初期農耕社会の物資貯蔵にかんするデータを収集した。以上の調査を通して得られた証拠は決して少なくないものの、それらからは極めて分散的な物資管理の傾向が推測された。この傾向の理由としては、生業戦略に係る移動性の高さがあげられる。調査した遺跡・地域では、初期農耕社会に付随して現われるとされる、移牧社会が発展していたと考えられている。

これらの事例と比較すると、テル・エル＝ケルク遺跡の例は当該の時代において超世帯的で公共的ともいうべき性格をもつ点で、特異なことは確かである。一方で、西アジア先史時代を通じての物資管理システムの発展過程という視座からみれば、異なった環境下にあるさまざまな生業を営む諸集団を介し、多種多様な物資の集約を志向する定住農耕民の経済活動を示すという点では、むしろ本流として文明社会の礎となっていくような性格をもつことが理解できた。

(4)　農耕・牧畜による生産経済が完成したこの時代、人びとは居住環境に応じて通年定住して行なう農耕や季節的移動を伴う移牧・遊牧などの生業戦略を使い分け始めたとみられる。集落での物資管理システムも移動性に応じて選択され、たとえば定住性の高い集落では集約的管理による物資流通の効率化、移動性の高い集落では不在時における物資の安全な保管が図られるといったように、様々な方向へと発展したようだ。

ケルク遺跡で推測できるような集約的な物資管理は、後の都市経済の先駆的様相を示すといえるが、双方をつなぐ発展過程は決して一系的ではなかった。生産経済の確立に支えられた初期農耕牧畜社会では生業戦略の多様化とともに物資管理方法の選択幅も広がっていたと想定できる。その多彩な物資管理技術のなかから、やがて後の複雑社会に対し最適化された物資管理システムが選択され、都市文明の成立を支えた経済活動に引き継がれたものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 紺谷亮一、小高敬寛、須藤寛史、他６名、トルコ共和国カイセリ県遺跡調査プロジェクト(KAYAP) 第5次調査(2012年)概報、岡山市立オリエント美術館研究紀要、査読無、27巻、2013、pp.25-42
② 小高敬寛、いわゆるシリア＝キリキアグループと暗色磨研土器の地域性－ルージュ盆地の調査成果からみた一考察－、西アジア考古学、査読有、13号、2012、pp.1-17

〔学会発表〕（計８件）

① 紺谷亮一、小高敬寛、須藤寛史、他６名、中央アナトリアにおける青銅器時代の都市化－トルコ共和国カイセリ県遺跡調査プロジェクト（KAYAP）第5次調査（2012年）、第20回西アジア発掘調査報告会、2013年3月24日、サンシャインシティ文化会館
② Takahiro Odaka, Storage and Portability: The Neolithic Clay Vessels from Tell el-Kerkh, NW Syria. The 7th World Archaeological Congress. 2013年1月15日、キングフセイン・コンベンションセンター（ヨルダン）
③ 西秋良宏、F. キリエフ、門脇誠二、下釜和也、小高敬寛、有松唯、赤司千恵、南コーカサス地方の新石器時代－ギョイテペ遺跡の第4次発掘調査（2011年）－、第19回西アジア発掘調査報告会、2012年3月25日、サンシャインシティ文化会館
④ Takahiro Odaka, Decoration of Neolithic Pottery in the Northern Levant: A View from the Rouj Basin. Specialist Workshop “Painting Pots - Painting People: Investigating Decorated Ceramics from the Late Neolithic Near East. 2012年1月28日、レーヴィス（チェコ）
⑤ 小高敬寛、北レヴァント新石器時代編年の精細化に向けて－テル・エル＝ケルク遺跡東トレンチの出土土器から－、日本オリエント学会第53回大会、2011年11月19日、ノートルダム清心女子大学
⑥ Takahiro Odaka, Storage Facilities of a Neolithic Mega-site: The New Evidence from Tell el-Kerkh, North-west Syria. 7th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East. 2010年4月12日、ロンドン大学（英国）

〔図書〕（計１件）

① Takahiro Odaka, Neolithic Pottery in the Northern Levant and Its Relations to the East. In: Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond. Berlin: Ex Oriente, 査読有、2013、 pp.205-217

６．研究組織

(1)研究代表者

小高　敬寛（ODAKA　TAKAHIRO）

早稲田大学・高等研究所・助教

研究者番号：70350379

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし